

心身障害児の運動指導、生活管理に関する研究 平成4年度総括研究報告

分担研究者 近藤健文

要約：各研究協力者により慢性疾患児の QOL を重視したトータルケアに資する研究が進められた。慢性疾患児の運動指導及び生活管理についてはマニュアル作成を目標として基礎的検討を始めた。思春期の早期発来が目ざされ、このことを考慮した慢性疾患児の管理が必要であり、また思春期に重要な教育との係わりが調査された。慢性疾患児のための病棟整備については、ハード及びソフトの両面から研究を行い、特にプレールームの必要性や長期入院児の問題行動等が調査された。

見出し語：QOL、慢性疾患児、思春期、小児病棟整備

研究組織：	1. 慢性疾患児の運動指導及び生活管理
分担研究者：近藤健文（慶応塾塾大学衛生学）	2. 慢性疾患児を対象とした病棟の整備
研究協力者：小林昭夫（昭和大学小児科）	3. 思春期の慢性疾患児の管理方法
込山 修（B&G財団健康管理相談室）	これらの課題は相互に密接に関連しているが、慢性疾患児のQOL(Quality of Life)を重視したカイドライン作成のための基礎的臨床的研究を推進し、具体的提言を行うこととする。
松尾宣武（慶応義塾大学小児科）	
大山建司（山梨医科大学小児科）	
赤塚順一（東京慈恵会医科大学小児科）	
長谷川行洋（都立清瀬小児病院）	研究結果
黒川 徹（国療西別府病院）	本年度は第1年度であり、研究実施期間も短いため各リサーチクエスチョンについて、文献検索などの基礎的情報の収集、調査プロトコルの作成、予備調査等を実施した。詳細は各研究協力者

研究目標：リサーチクエスチョンとして下記の3項目を設定した。

慶応義塾大学医学部衛生学公衆衛生学教室

Department of Preventive Medicine and Public Health, School of Medicine, Keio University

の報告にある通りであるが、以下リサーチクエス
ション別に述べる。

1 慢性疾患児の運動指導及び生活管理ならびに 思春期の慢性疾患児の管理方法

これらの課題については第3年度にマニュアル
を作成することを目標としたいと考えているが、
そのための基礎的検討を開始した。小児慢性疾患
児を管理する上で、医学的治療とともに運動指導
生活管理は重要である。これまでは運動指導及び
生活管理ガイドラインは疾患別に作成される場合
が多かったが、小児の生活をそれぞれのイベント
ごとに横断的にながめた指針について検討を進め
ることとする。学校、病院等の集団生活を中心と
して、小児の Quality of Life を考慮した具体
的指針としたいと考えている。また、これらの検
討の基礎となる思春期の早期化についても注目に
したい。さらにこれまで集積された情報の収集と
ともに、情報の欠落した疾患等についてもできる
だけ研究を進めることとし、慢性疾患児と接触をも
つ広範囲の人々に役立つ指針とするよう努力して
行きたい。

小林班員は慢性疾患児に対するこれまでの運動
指導及び生活管理指針についての基礎的情報の取
集と慢性疾患児と接触をもつ広範囲の関係者特に
園医・校医並びに養護教員を対象とする指針の概
要について検討を進めた

込山班員は先天性心疾患児（ファロー四徴症術
後）について運動負荷を行い運動能の経時的変化
を検討した。運動能は経時的には大きく変化しな
いと考えられ、また10才以下の児では十分な負荷
が行えず、運動能の評価には注意が必要と思われ

る。

松尾班員はわが国小児の思春期の特徴を明らか
にするため都内及び近郊に在住する1304人（1~19
歳、男731、女573）について、二次性徴（Tanner
stage）を評価した。日本人男子の思春期開始年
齢（睾丸サイズ ≥ 3 ml）は10.8歳、日本人女子の
思春期開始年齢（乳房Tanner stage 2度）は10.0
歳でいずれもスイス人に比し、1歳低年齢であっ
た。今後、小児科病棟の建設・運営において、小
児の性早熟傾向に配慮することが肝要である。

大山班員は小児慢性特定疾患認定患者の保護者
と小児科医に対して、患児の教育と心理療法士、
ケースワーカーの必要性に焦点を当ててアンケ
ート調査を行った。その結果長期入院を必要とする
患児で、教育への不安を訴える保護者が多数認め
られ、病院に学校が付随している場合としていな
い場合で、教育への不安に差を認めなかった。心
理療法士、ケースワーカーの必要性に関する保護
者へのアンケート調査では患児自身に対する必要
性は予想に反して低値であった。

赤塚班員は慢性疾患の思春期の患児をもつ保護
者（130名）および担任の教師（106名）を対象と
したアンケート調査を行い、患児らの学校生活に
おける問題点を明らかにするとともに、患児らの
心理、教育に留意した total care において重要
な存在である教師の病気の理解度について学校の
現状を把握した。その結果、保護者からは教育に
からんだ問題と学校の対応の改善が、教師からは
病気の情報提供の場である医療サイドとの連携の
充実が強く望まれていることが明らかとなった。

2 慢性疾患児を対象とした病棟の整備

長期入院中の患児の QOL の改善についてハード及びソフト両側から検討を進めた。

長谷川班員は（１）患児及びその親へのアンケートおよび（２）米國小児病院について調査した。

（１）のアンケートで関心の高かったもののうち、面会時間およびプレールームについて欧米との比較検討を加えた。この結果、制限時間の少ない面会時間と広い（欧米なみの）プレールームの導入を考慮することが必要であろうとの結論を得た。

黒川班員は小児の長期入院に関する文献的考察を行うとともに入院患児の問題行動と入院前に育った家庭環境の関係についての調査を行った。

文献では、入院は疾病の発生、季節などの自然環境、家族の状況、住居などの家庭環境、治療法の変化と関連していた。入院中の問題としては入院に伴う不安、家族からの分離、病室環境、単調な生活、経験の狭小化が挙げられていた。これらの解決法の一つとして屋外での遊びを取り入れるなどの対策がとられていた。また入院患児においては家庭面、食事面、精神・情緒面の多岐にわたって問題が多かった。また入院中の問題行動や知能障害を伴うものも多かった。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約：各研究協力者により慢性疾患児の QOL を重視したトータルケアに資する研究が進められた。慢性疾患児の運動指導及び生活管理についてはマニュアル作成を目標として基礎的検討を始めた。思春期の早期発来が注目され、このことを考慮した慢性疾患児の管理が必要であり、また思春期に重要な教育との係わりが調査された。慢性疾患児のための病棟整備については、ハード及びソフトの両面から研究を行い、特にプレールームの必要性や長期入院児の問題行動等が調査された。